208
12
694

国立国会図書館　花迺志満台 4編 208-694

ガラス使用

法翼
連理

花の志満台

初編

下

208
4
694

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

冀園連理花廼志満臺初編巻之下

江戸　松亭金水編次

第五回

夷女の悲歎

天地の量るべからざる地をも測るべし。計るべからざる人の心といひけんも理あるかな。繫縛のおもいたちまち慈心に眼くらみて弟の盲を縣ーもらく。小六は接ぎの鼎紙いかく殺げーの為二分まで完ぶとと懐へおさめくけの芝居見とと。出立むりの千両箱の影ちらつきて名の部山を法三とと。ろけかーく発覚間ぶ。まくと来かる

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

ばかりの。おきやくさんとうけとるまり「コレサ」おきやう。おるねふを
と天晴るへナ「ヤ」ぜまうとぞんじまうす「具」ぐるどもこへ「具」ぐるより
つる。おもへが。何ろ立流る打粉で。何処へ奉りよ。ぬりけるを。文ぶそうと
コレおきい。いうどやかちーとくなんでおく。おれ生のるへぶとして人まる上
まんが好奇女でも。余まり多仲ぶつけまぶるを下いされて。おまえ
ゆうこりと「ホンニ」ヨウ。おまへ。さんよ。清合で。嫌よ面
目ぶでございませんヨ。何ぶヤスもアノ。ぶり。まぶ。ぶろうふの雅女と
中せものでぶうもて。死ぶ死とまいりません。「ホヤ」ぶ死ぶき

ところへ。時んでうう二タ月ばかり。そもそもぶやうさぶ。不義ものと
「ヒ」ヒ「ヒ」ヒ。「イヤ」おかそんるべおれの毒ぶ。ぶろうもおれり
中まるアるぶ。「ニ」おまへさん。ぶ門ぶろうのくを。ぶ。ぶりろくもどぶうま
せんうう。「ハ」そんまへどうちに門ぶる。「それ」ハ。ぶ。ぶ
ません。二三日のうちまへ。ぶ非とも。ぶろ。ぶ。ぶるぶうふいてまぶう
「ハ」ぶ。ぶ。働のをくんるとろ。ぶろやぶりぶのく。ぶ。ぶ。ぶ。ひよ
何処をうアトおうりまへ。料理。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。二階へ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ

ものもたがはぬ。順番にはいるみうち。張
合はなくて出番。そのうちをのをたのをける。おもへ手拍子より落く
こと少式こんもう〜完成とこそ。あを偽とうち呼ろう〜「ヲヽ
さえぐ。ぢうとちく。ポイ〜おまさえ〜ト浮まく。アイト料理やの
二階へきするおまがまるまり。紙色をもふさげく。幕あげの
寒こそさ。右衛門とび者ぬ侍よ。おまるへ二見三見三見まそと
そもへ「絶づき」「ヲヽ行くさんぬでございます」「伯ごの行のん
ごこ出まりちく出るゆ。十二いろ〜ヨ「それでも」「十二サいとこの小

行人具相「サアおまを遠方へ行く。ろく婦さえのそばへ来る
其「ハイそんなもの出先なさいト。おまが例へ変しければ張合な
はくぐ〜ろく「今あるわどい。お見ご。そこく年ろう大難ごの
者「さやうサ十二ろ人ますせんれく」張「ろ少ち新人どえが病気
ごといのるゆごの者「モウ新人えひさの病気。そこよ母さえへ
ろ〜。ひろ〜十まで年ものいろ行で。みをこの見が手ひろ。かこい
そうごやアございませんろ」張「いろさ及世ろハ唐命ろ。人ぶらく
らものあるものごの。ろう〜よやこのおもをろんごア。ぶうごもそ

のう間あでくぐ。ゆるゆるのハヱてあるのサ。アイサ。それを
ちてきろけ。まんけまで。舞ぐいろ孫へのものでろう。で行素地で
なりませんヨ。そーこく弟一番ごと申。たぐらしいのが美人きく孫へ
ゆそのうちが当ろ孫くく。コウ要女。あんど絵る。ソレ。ろ吉。ろいく
ゆんるてエ。このきろねく。ゆ孫へ。ゆ孫へ。彩しぶっかりして。あぜうち
きゆゆ。ちんるうゆ。ゆからぐらう。ザ。ゆきえ。孫へ。ゆるるヨ。きるゆと。ある
さえる。孫へ。とゆるゆる女。ゆ人ゆるさぐいろく。若男ろう。ゆゆ
きお孫へ。ゆ間へ。ゆ門く。ゆ。ゆ。ゆ

いづれるトいそまくろ將殺ゐるく心るくぎもう絶め
おまちわらく礼をいの。殺ゐらちわう第く（注）あんのおめく
そまてむかり。サラおまおもちよ酒式（注）バイるふ蘭へ大の
きうひさ（注）そんあう假でも（注）ナニモウおまちるさんお
そんあうノウおまちさん。おい邪ぞんが待てるぞらう。サラく待子
よおうりョトいとれておまちへ僥倖とぃとるとおまくまるう
おまちもうく酒子の侍ぞびとめく待ょふぞうけ。耳ふに
よせ小聖ふ有り（注）おまくよかるて見物式ちるとおも

めこのいアおうヨ。どうぞちょとしくもアア侍るのぞ。一ぞまて
百式おまぞ。こうけのあんるふ怖らしくてもぞ。おんと楽しい侍
のわる人アア方の世界よるまぞ侍ょ二ぞいやらうとおり
おまる。アア方ぞ百式まるふ小ちまれうり。遠よまーぞまアあいかく
ちめ人さんウンと言ぞア。今日ゆも歩よまるーをまるが。まアア
ぞうぞおまさん。ナニ。そまぞあわちがまるあれく。エよくあるくも
アア人ぞ乳ふ小ちるヨ。あんのかまふるうめうものう。そのうんふまア
笑まる。ふ六さんいモウ仏がとりぞ。ぞまぞ式ぞ式侍の法のと

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

笑ひもやアあるまいだ。そんな人が実の義理のとる麻縄
織よりかつく居るかめんが可愛そうぞト笑てゐるがいよ
く作兵衛人の妻とあんこう門がとるるゝひとといひながら情の
ふかい小ぢさん。そうゝさるのゆらうとも。努々ゝ思ねうこ
てさよこぶりめば胸もとりさけて。抱もいそだ泣ふせば。お
吉は資平を捲きさもり一ぱいと抱がつぶるゝぢらう。それ
ぢうう抱ゝうとてーが。あて作まひるせんといふのゞ。仏の
人ばかり男ぢやアわるゝ。外よいくらも張切る人がわるヨ

ぢやとがあるのゝうぞく。白紙掃るゝ。ゝ乳がも
ぢぶ。天間町のゝ人ぢうちんでうふ。おもいと砂でも
かゝて。ぜんるせん。ゝでせん余まりのるゝよ悔いやうぞト
ろ浮年場の恰制奔に。ゝうちりやとゝ人ぢ。ぢうど
たえく遅るの。ゝぞうりをいろくよ。縁ぐるものこと
ぶ。ゝ考もそうゝと女四人乳よかるゝーざはゝさ身にあまり
余ぢ紙ちがる。ゝのびゝの。ぢゝよあゝぢ知はぢうよく
よ点をあげ。そうゝのゝさりい知ある。お分とゝぢ今

母も。編さまとこのが腹がこちまん。こいつのあの二郎三郎
小六さんのお情で。父子が命を繋さけ居。さて今さら
勝つれて。こまごまりとるまでとて。おん世人あの色人あるも。
とかせる乳にごぜいませんが。かの人がわんよ情ないと泣伝
を抱きおこー こまさく。そんあよ泣ごといまみれば
うつるまでがのよと伝笑く。アヌよござるお方の世話よあん
あさく。ヨウ思いるとだいを拾くうう。ぶうごあまさん見ども
まご不い乗知ッさく。あめへ自泣のごゥウト編しん去

為門が紀に泣ど。おそうこい一遠よかのさま。胸よあまうく
同ぶも。ふく。洞よくのう 狗のまこ。陽子ちくく かくまく
ぬうんあくりく。おちの 猟ごこ。バテこまぶ 殺ぶ伝。伝紀
でうんもおがっこい。ニいのもそのとアヌ 奥の殺人よ。ふぶつッ
て一ち罰ッさあるちうが ちゃ子まい。そうぐくと独うる
ご紀。元の産くこちかうう。かの強いまあどよく 吐ーぶ。
まも言知ッく。西と来くこうれけり

第六回　恩愛の自殺

かくてあるまゝに酒くも。家よりかくてさぐくとぞ。ゆひ出せばまゝ
さるべど。世人胡蝶の一花の春。ちるを知のとゝいべえよ。小六が
ゆくゝ世外絆るく。おもも頗る主人と。おのゝのゝまゝ
ゆの。何ぞ仔細のるゝぶやっとゝいゝめくゝ世人ゆき。あや
かくのそぐ小六が身よ。さりゝべ大事いふゝく。狗のおりゝ紙
つげ出んやと。おさゝなさる洗吟のうち。父の兵衛はもやくと
紙もるを僥倖。戸より。ゝ郎しるもぐ筆東縦ら
ある筆ゝく。おゝが吟の冷身をまゝるひゝ恨ゝ哉ひゝ

嘶ち。手ゝのおゝひ紙をゝ〜く。かゝゝゝあて巻納め。さくゝまの
僥よゝ主ゝ情ゝん。ひゝゝと主ゝゝゝ互の大事ゝと。父ゝかゝ
ても屋ゝゝ。役ゝ小やゝく当ゝ〜。手匠のうち小秋ゝて
その便宜をぞうがひる。その次の只父の兵衛が。乳分も
例ゝゝゝとのひく。床の上ゝ記あり。例よあゝゝ浄瑠璃
紙よゝゝて厨ゝ居ゝゝ〜。ゝ主僥倖と雪踏ぐゝ。お去
ゝ母紙ゝかの文を懐よゝ。人を形ゝそくゝんと。ゝも
そゝよゝゝのゝ。引ちゝくゝ入来るお吉。ゝ緒のゝゝ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

いまとよ様御の御書げ。天竺へ御ごうと結び繋。ひ結の
かと御さへ御ゆく。兵庫が門ふ子と御ひ御ゆ御ア
お去さんの亀ハこでございまんスト聞て兵庫ハ御を知
ハ八イ お去ちとこちらの女児。何ぞ用でございまんか。で今
ちとと出まゝ。右へヤ お自分へ御ア御さんアノ児のお
御さんく久しい御病気と笑ます。そまでもちのと
お授ようトいひて御まゝ兵庫ハ御ハイく御ごう
ございます。今日あどハ金ど授ごゝまん右へそまハり

十九

お伝御せご。お去さんとハ御方ゝ。お出ましいてまんり
まゝ。御遠て御さんさん。お伝ハ御ゆかしまゝ。
そまでも御ア児のお出でいよ。御ア御病と笑ま
ゝ。兵庫さんどもございます。御ア見ゝ隠くと笑さ
も御ゆくありまんゝ。お大事に御さいます。私ハ豊後国で琴
の師匠といてます。和尚一と中主の御ア婦で。者と中しまんが
御ゆんみ中ゝ御去さんとも御ところ中ゝ。御ゝ
それで今日ハ御ゆく御ゆ御ゆ御ゆ御ゆ

二十

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

いづれおまへさんにあつて。筆ケうとおんなじ一ッさゆやアるこねこよけ
ぞふぞ世ものも枝ようくでお心しづかでさいたびあいがと。たくも素じ
まくらふ。さのいなうさでの形も大ぶくの藤ようでございました。へ
ハアそれでいがとうそんじます。せんが。豊藤色ようつざくもの心ハテ
生勝ものもめづ。えかさ今よかくうませう。ヨリ〜茶でもなのづ
ナート身ハかさつるほど年ものの。ちりるーぶり成ものもいがく
「さ」手ものまひるされませる。ヨさもモウをうしてのもの
まりません。ちのつとおいしいをいうまいませう。外のるそのでございま

せんが。おまへさんが久ぐくのものうづくひで。内仲のものもの間りのること
のこと。まだそれアのもの見もいろく元祝播で居るさうん。側でこんうの
も可笑そうトナて今後ぼくのうのハぞうも良生ホも移ハ来
つまりませんもの。西そちやうどよいもの心しづでございましんうさ。へ
全このホイぞんじまいませんが。ロ仲切るこかづけるうこぞうまん
伊のうおあるこ。女四成のくえひうこでも。へ十くあまへさん
人の嫁ふるるでホあつくぞうしてサ。移ものも心中生い千はまるる
のロの系中で。今ハぞんとあこ月形でこざいまもが。アノ四成

ふんく。どうぞ用二ちゃくくゝめで世話よろしくとあつらへ。
ねんもまつたく。手紙をかうまざ〻児も滅の推女用二ちゃと
いふ具形人。減多にもつかせません。先さるの風のかたちに
うちつくるとう。後ろ白ッこう。ア児だらうこう　あまへ
えも。お仕あわせ手ちこてきさ形よろこく。みちゃとちゃの
ちゃもちうこといふもの。何といつても先ぐ仲まへさえ。あ人のと
ぐこう。どうでもありまさアるト笑て長浦い形式あるこうあ
へこと家ぐ〻ぞんどもおらうね。新の紙月ちゃこねぐ。まづ人間

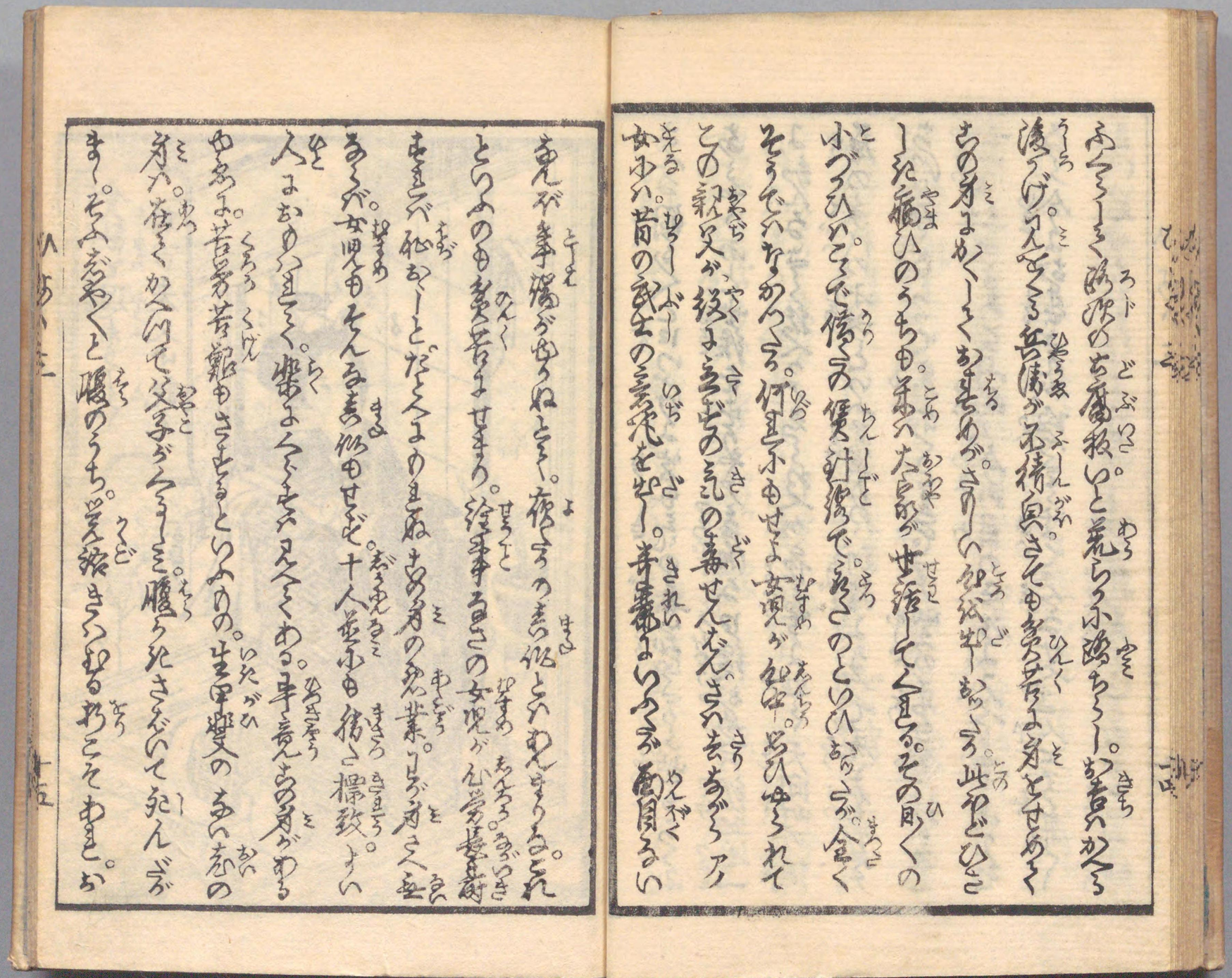
よ蓬さと振。前義を夢こちゃるこう。おーの金ゆゆるつとせちゃぐ
蓬的人こちゃ紀渡世帯。ゆ月いどうーこく知ーてとち月く
のこちゃーふも。さー蓬人こる。月とのちゃこちゃ。いち新い金涙形作と
北條家ちゃ四一字洋頂。ゆめ死こるゆちゃやちゃーし。おーー
のちゃより浪流の月とちゃ果ーその月ちゃ。こと人ても渇
ーこちゃ。二蓬ちゃ仕人武士の家地。そまてちゃ実ぞや振とちゃて
人の武場のふせちゃと。近蓬ちゃ蓬れ亜振の一こと。女ちゃらず
い甚ぐ。ちこちゃとこちゃあまぐど。根ちゃちゃあちゃね女性のちゃ。イヤモ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

さるうの汚らはしきものと。笑ひ耳にのちまでぬ。さうく
さと成ート怒り面よわくふまえ。老の一言おもかの笑ひ。
うちはらひ（まく）弘法の侍ごろう。女児成人の戒ものう
とは。何が汚まるとえ。まく〜さしあかーや。金ふるが出来とて
稼ぎの者仰すでーと女児。千ゆさるのは中よ。関ふまと
れば大遠る出世じやるいう。紙屋の手代よりぐさまれて二朱ら
一分の獨金。世ろくり又子が命成繋ぐ。弟成笑ろう小ばら
ひも。文でぼろく屋ろでふあいう。大そうらーいるをいひる

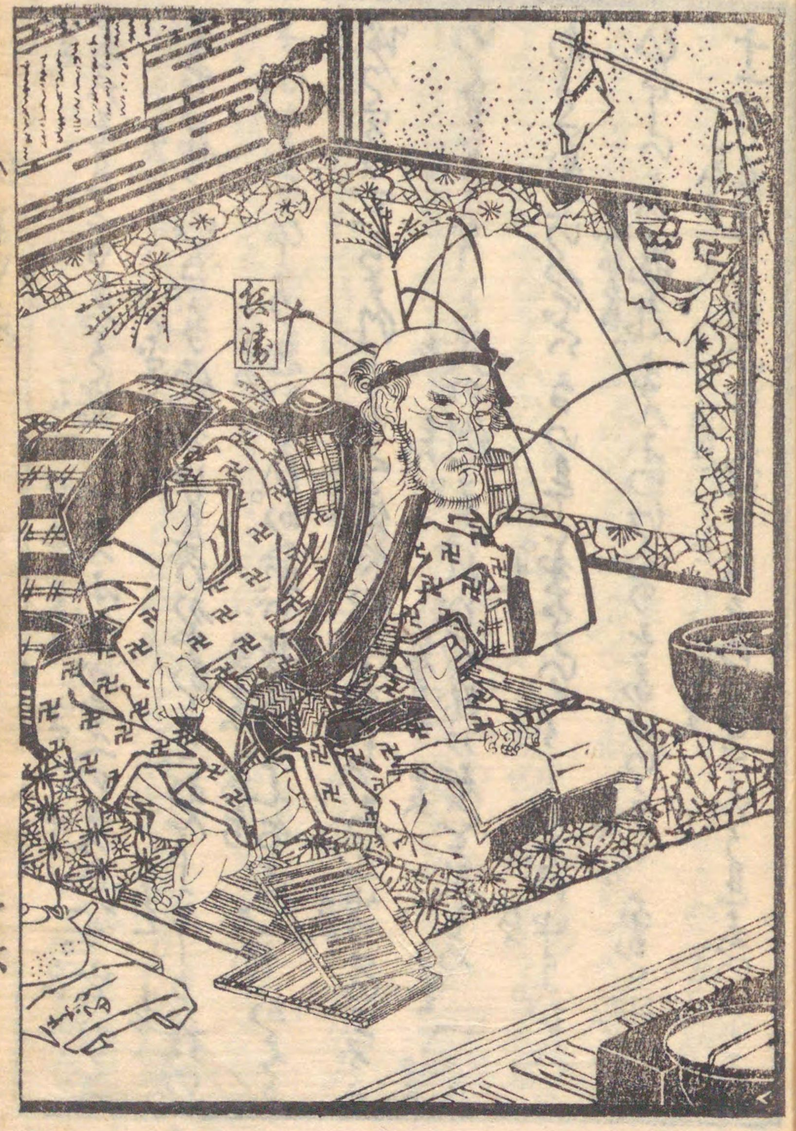
さんる。困るくとにつづけよ。笑ものこの毒第ぐろう。些もらくふ
あくまうわと。世話をきりやアこ流ふは絶おめこの紙を逐一
よ。初んるさくふ人ゥア考くれ人が。夜寝るよりく天間町の紙
屋の手代の小方とりの。差上のく別深よろて。屋と義ちまア
ちりとぐ。のらッて完ふくこまこでア。関ふの弟の笑ふれすんと
女児ッ子がよろとぶ面ア。今の目のさんよりこんるあうぐろう。そ
うう今よあまさんが。鳴つくう笑て人ん。十二人とろ兼ぐ
ちいやぐとおりふぐよりがりトいひ抜こくいとあ色ぐ。顔

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用



あてこしてくるの所のもの屬和いと荒らう小遣ちこし。もの書かくる
後ゝげ。ゝんでくる兵隊が不待臭さそも貧苦よ身をせあく
もの身よめくしくもあるものが。さりしい如何せ。ひとこと
しを病ひのうちも。まいたが世話してくれる。その月くの
小づゝひいこゝで借ての貸計濟でゝるこのとのひあるゝが。金く
そうでいなかつゝう。何まふめせよ家が知せ。ゝんゆゝれて
この親父が級よ子どもの乳の毒せんだん。さの去ゝあゝう。アノ
かゆい。昔の武士の義氣を。せし。并義よいつゝが風貌るい

乳が孝獨がゆうれいとゝ。夜ゝうの志の祖とゝ。れ
とゝみのもの貧苦よ。せまう。絵事ゝ者さの女児が仏学長蔵
まゝべ祖ゝとだゝよのまねあの身の悪業。ゝが身さ人を
ゝべ。女児もそんな者仏のもせど十人並ゝ。物さ標致よい
人よおのゝまゝく。樂よくゝ又ゝくゝある。手ゝ貧あの身がある
ゆゝよ。苦学苦難もさゝとゝるとゝみのの。生甲斐の あい志の
身ゝ。苦ゝくゝかゝゝて父子がゝゝ。腹ゝ死さゝがいて死んゝが
ます。そゝゝがやゝと腹のうち。ゝ絵きゝるゝゝことをゝ。お

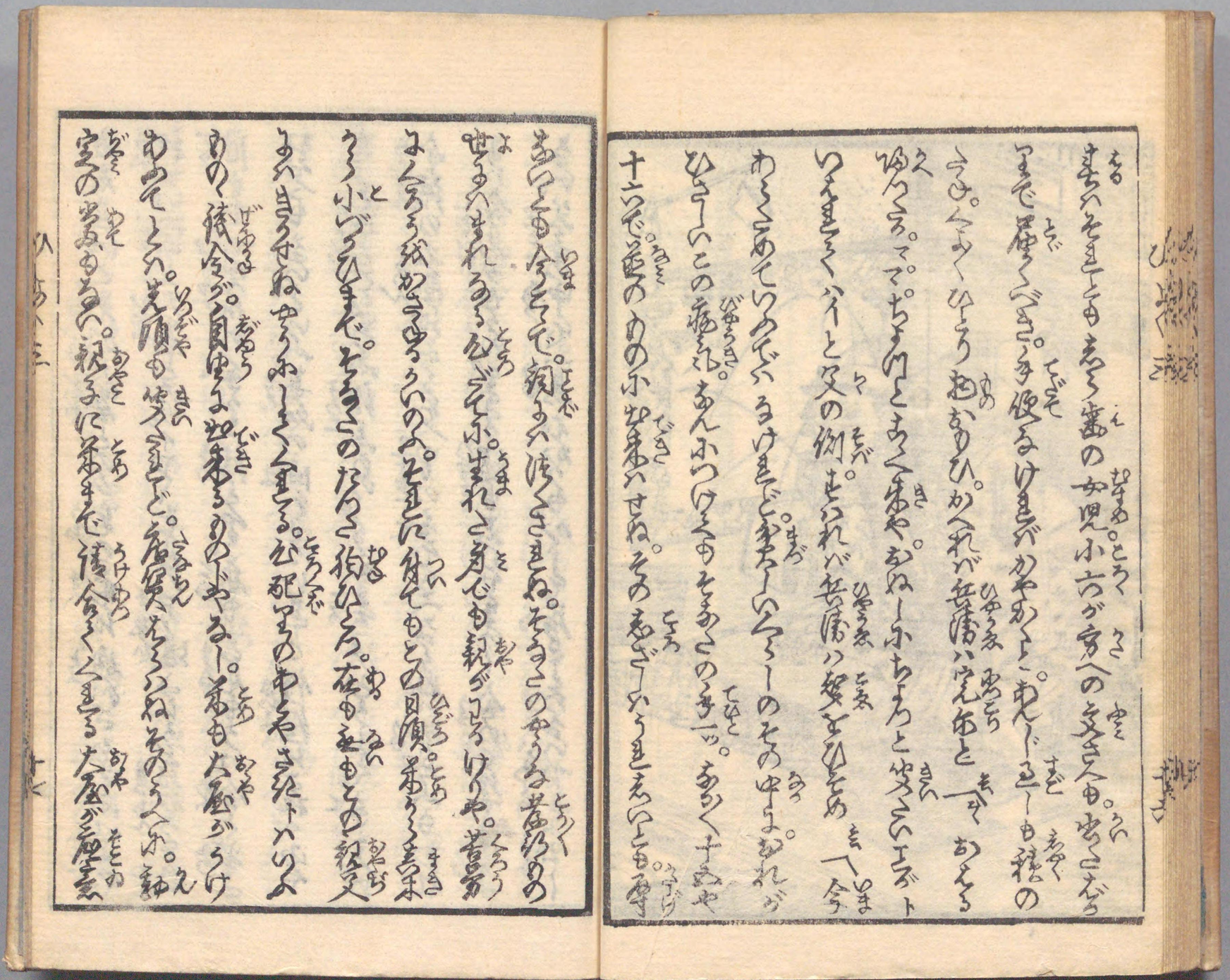


国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用



まるまるそまつとも。ちゝ蚤の如。小六が方への文さへも。やこだゝ
まで。屋こべき。手紙るけまべかやかゝ。ぬんでゐこーも。稽の
ゝ。くゝ。ひとり。おかりひ。かゝれば。無沙汰。完本と。へ。おくる
ゆゝゝ。でちゝゝとあくゝ。ぬや。おねーふちゝと。笑ゝゝ。ゝ
いゝまゝく。ゝイと。文の。例。ゝられば。無沙汰。ゝ。ゝ。今
わゝゝあゝいのべ。るけまで。ぬ。ちーいゝゝーのゝのゆゝよれば
ひゝーいゝの。ぬんふつけゝ。ゝのゝゝゝの手一。ゝくゝ。ゝぬや
十二で。ゝの。ゝのふ。ゝぬ。ゝね。ゝの。ゝべゝいゝ。ゝ。ゝ。ゝ

まゝゝ。ゝ。今ゝで。ゝ。ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

物とて。さらふ同答の言句も出せ。さて傍くを兵庫へ行う
第。傍所の人々ゝ動し紙きんぐ。書しいてゝ場所ゆく
身をけがしてもこの秘文を。高くまうとゝ尊ぶ。面し
とゝもで山ゝよりも。貴でもらふとゝよ。世。黄手家の中
どか。人ゝそまゝ二門減び。世ゝとる。彼のあいゆ多ゝ辻者を
さまゝとゝふ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

頼ばかりなりけり。コリヤ猥なる。今ごろちと天間町へ往て。その小六ばつまて来あまこ。おぬしゝ繋がる男い婚今月あのく今までの。れもいのくり後のまとの。時人でおれこのものある。時分ぐーで閑ぐーくとも。ちとちとさで呼で来ゆまといとれて頼のりこげこも。おちぐ頼よ備るくひまりとばかりまて居こう。まよ往ことて来のせまい。ばでこ言こうと。ばやさえ。アイと同報もありこれ。のおくまる成兵衛いあこえまへこのゆ成そのうふのもぢくまこぐ。世間ぢや燈成京生ぢや

あいこう。ままいーせもべおそくこる。年ゲ書てへせこーちく一刹ものこう遊こいこく。まくくまこう往く来やまこと。せこえられて女児これの。右たの洗冷もさぐまこう祝ぐこ物いあこくく降けこと。世の猪このもいふめまべこまを等こい男こあひ。まこよ影ー成こくまこくこれんこ。おのひかくーこくこちあぐこ。へこん。おこう往くこまのまませこうゲこ。おの会こをあげくこくこへイやく服こ金ここるい。それこうこあこうトせこまこの紙文ここあこくこ往こと。常こあの遠ー。かこまこか

さげる桃灯の。彼も藤房で。敏捷草。父さまのうく敏の黄瘤と。いろみどこまも名絵自性。おまもの黒ぶ紅ヒてや。もちまね貢遠も父の命。ひこ二つゆ男ハひとり。茶碗さぐーくもなりう。こまでぞ紅子のうまとこの后ぐまぞおのひあハーける

花の志満墓巻之三終

東都書林文溪堂藏版中形繪入本之部目錄

大山道中膝栗毛　瀧亭鯉丈作　初編二冊　二編二冊　三編二冊　歌川國直画

閑談春の鶯　二へん二冊　雲鶯作　二へん二冊

寒の紅梅の日待　全三冊　振鷺亭作

恐可誌　東里山人校合　歌川國貞画　前編三冊　後編三冊

戀孔雀竹　初編三冊　二編三冊　三編三冊　二代目一九作

女實語教　前編三冊　後編三冊　金水作　春水作

滑稽和合人　瀧亭鯉丈作　初編より三編まで

虎の尾さくら　全三冊　墨川亭作

むすめ咲草紙　全三冊　東里山人作

久松艶の由屋　前編三冊　後編三冊　鯉丈作　東里作

戀孔花染　初編三冊　二編三冊　三編三冊　金水作

時雨乃袖　全本九冊　五代目瀧川路考作

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

玉川日記 初編 三冊　爲永春水作　廓の櫻 初編三冊 東里作

玉川日記 二編 三冊　爲永驛亭駒人校　さとの桜 二編三冊 同 作

玉川日記 三編 三冊　爲永多満人補校　はしれ櫻 三編三冊 同 作

玉川日記 四編 三冊　松亭金水校　若むらさき 初編三冊

玉川日記 五編 三冊　松亭金水校　同 二編 三冊

拾遺の玉川 前編 三冊　狂訓亭真作　同 三編 三冊

拾遺の玉川 後編 三冊　狂訓亭真作　同 四編 三冊

右玉川日記全本七編二十一冊此度麗澤改め製本念入り上すべし

沖津白浪 全三冊　鶴屋南北作　歌川國貞画

明烏後正夢 初編三冊　楚満人 鯉丈作　三人娘 初編三冊　南仙笑楚満人稿　門人 驛亭駒人作

同 二編 全三冊　楚満人作

同 三編 全三冊　楚満人作

同 四編 全三冊　駒人作

同 五編 全三冊　駒人作

明烏寝覚繰言 初編より四編まで十二卷　楚満人門人 連中著

同 五編 全三冊　楚満人改 狂訓亭校正

同 發端 全三冊　松亭金水作

全本三十三卷ことごとく業仕

二編 三編 四編 全本十二冊

永代かぐら 中形よこ本 六冊

園の雪三勝草紙 全六冊 楚満人作

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

妙智力　全九冊　東里山人作

娘ぢん孝記　全九冊　船山人作

雙髪満久羅　全本三冊

春駒驛談　前編三冊　樹亭門人作　後編三冊　松亭金水作

同　王ゲ池　初編三冊　東里山人作

同　二編　三冊

同　三編　三冊

浮世風呂　初編　三馬老生作

人情浄瑠璃　寄代滑稽　寄代滑稽

戀乃宇喜身　松亭金水作

初編　三冊　二編　三冊　三編　三冊

箱根美談の浄瑠璃　三千助　初花が

松竹梅三重盃　南仙笑楚満人著

前後　六巻

同　拾遺　楚満人　在訓亭作

前後　六冊

笠森お仙のものがたり　春長亭

寄談

善惡表裏　人心現機関　増補再板　初編三冊

故人　水町舊三馬著

歌川國直画

人の心の裏表世事をまろめて人情浄瑠璃

藤枝戀乃柵　楚満人稿　駒人執筆

初編　三冊

藤枝紫後咲　同　斷　全三冊

同　三編　同　斷　全三冊

目録

吾妻錦州 婦女八景 全六冊
爲永春水校合
爲永春蝶鶴本

尾張の國名古屋山人東都旅寐と号せし
狂訓亭の八景所作なり
中のゝ偶居のもとにて
人情の極意古今稀代の新板なり

花の志満臺 初編より四編まで 全十二冊
狂訓亭金水作
歌川國直画

艶道通鑑の基本人間男女の為にもなるべき
物語なれども
辻君と思ひ侮りしいの不仕合かく百年雲の
幸薄くして唄はるゝ色も小春と呼ばれて
やるせなく想ひ思ふる男と添寝の本意成遂ぬ
一代一付の物語今新板なり

藤枝若葉添竹 全六冊
狂訓亭爲永春水作
柳烟樓歌川國直画

初三の時代より有五年の流行ちまへ今おいて
ぞ咲つゞけ花の添竹古き所をもて捨ぬ條
下も多くわるくすぶれば甚長葉に成つけん
もいづくれば紙五編のまゝ切りうくしき
と思ひてかくるけ今様なるべし
新向も目前もとゝく編るべし
ゆゝしむべんくと過ぎ門人ぶげ筆をる
そもそもるくふゝ〜〜〜〜〜〜〜〜
てゝ思ひる老木の思ひ新葉の添竹ぶ中
るべ金新九冊

歌舞伎織系廼調 初編 三冊
葉亭行成作

人情の風態ふるはしく袖乞の浪人小三
派の本名わり丈長の卿君化粧の新表
かけ〜鳥田小車借金しの手強ち身貴
の秘訣忠義の手苦時代と曲説の物語り
例の中形本とかりて頼見世任言と名ゆ
いとたゝそろさかりひともやーう

日本國事考 中形本三冊
中形本

児女童蒙小日本國中の事ゆ事賞べ
早教の重法すべて日用の文字ものみ思ひ
ゆとものあらの珍書なり

伊都埜志良辺 二編 三冊
糸玖志羅遍 三編 三冊
葉亭行成作
狂訓亭校合

此二編三編の初編の野暮ゆ風俗ゆ
様ゆ狂訓の作ゆ文
除とんとはいとてはいふの前編ゆ
美るゆ門流ゆ
ゆ念ゆ
ゆ
ゆ

秋色艶麗

處女七種　初編三冊

狂訓亭主人爲永春水著

春景画ハ秋の七草ハ春の人ハ見ぬ風俗の乙女ハ七人撰ミ出シテ実ハ世ハ
どうしてこうした豪奢美泉ハ筆意の玄妙
さまざまの作ハ多くハ紙数の尽まり有て
思ふまゝ書ハ洗ふ雖ども着情の心ハ
ハ秋ハ桔梗ハ朝顔ハ菊ハ
ハ一個の乙女ハ種々ハ
京都の乙女ハ
樂しく深く
評判

處女七種第二輯　三冊

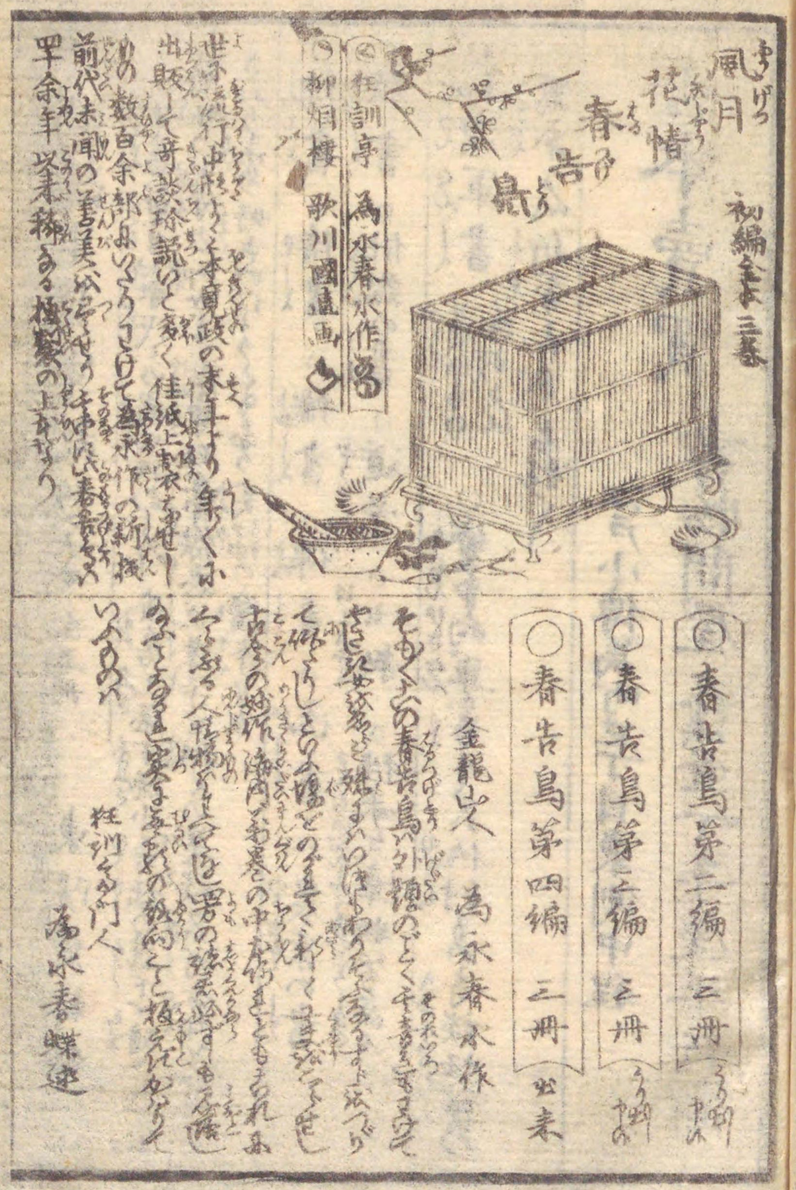
爲永春水著

あるべき初編ハ捜索人情の極意ハ
尽くし京と江戸との世の意気地をひゝ男
萬ハ同志のおもひ出と穿りくもるん

處女七種第三輯　三冊

處女七種第四輯　三冊

全本ハ十二巻ハ
いつ〳〵次第の續編一集ハ越ハ製本
出来遅くハ
評判



○春告鳥第二編　三冊

○春告鳥第三編　三冊

○春告鳥第四編　三冊　出来

金龍山人　爲永春水作

世界ハ行中ハ本覚政の本三十ヨリ年くハ
出版して奇談珍話ハ
前代未聞の美ハ
平余年ハ

狂訓亭門人　爲永春蝶述

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

南總里見軍記 全五冊

南總隱士 東陽齋輯錄

この軍書は里見家代々の武功をあらわし安房上總下總ふ猛の籠城の大守と仰がれ関東の豪傑忠臣孝子を招くの美談名所古跡をこと〻さ〻りくわめ好古のたよりともなる実録の繪本なり

○神書 ○倭書 ○儒書 ○佛書 ○医書 ○農業の書 ○歌書 ○俳諧の書 ○道学 ○女教 ○往来 文章物語の品々

○和漢軍書 ○通俗もの ○賀茂向軍書 ○仇討の奇談怪談乃 寫本 ○絵本 新板 古本 名彩〻

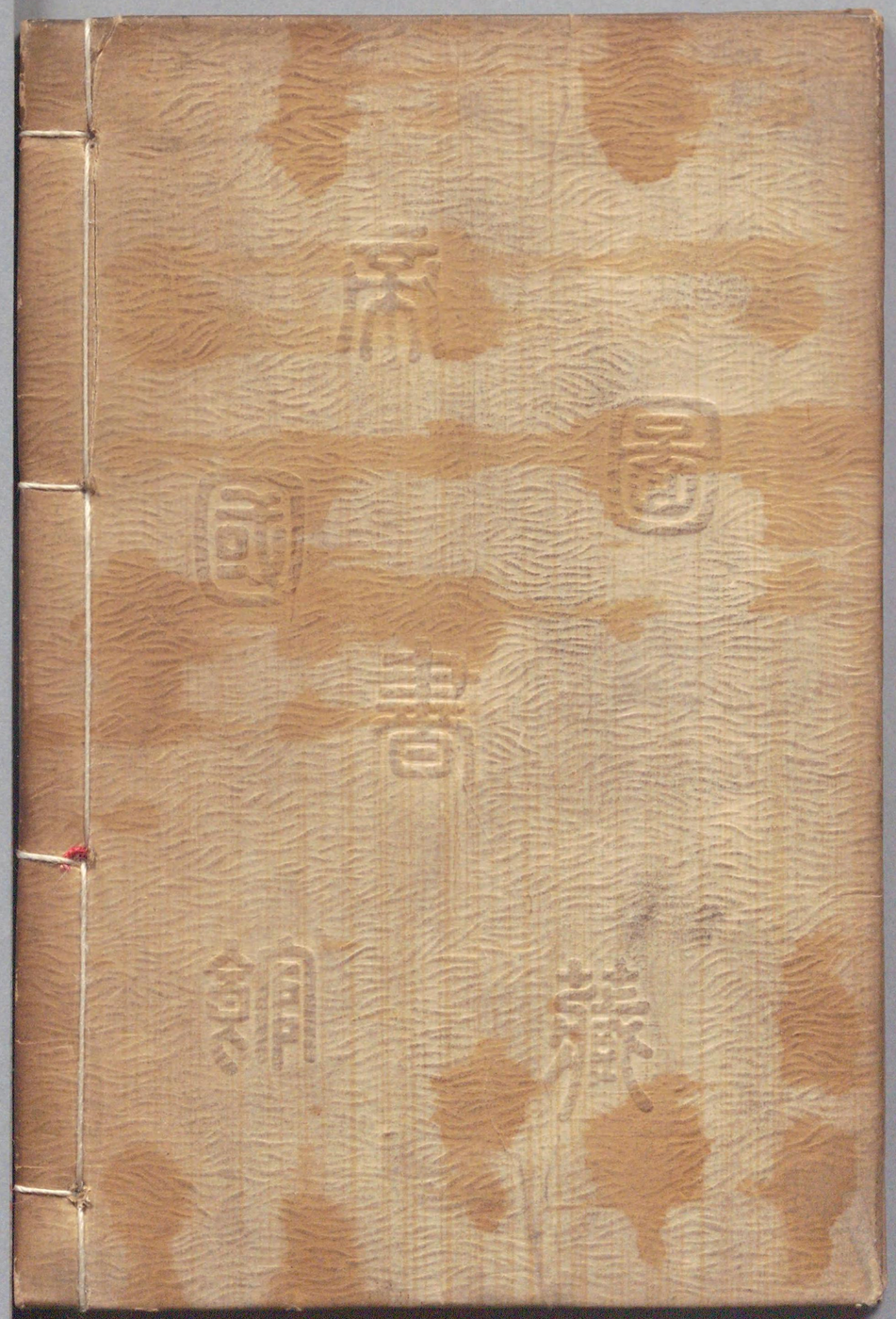
古本賣買 書物問屋 文溪堂丁子屋平兵衛
江戸小傳馬町三丁目東側中程

国立国会図書館 花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

208
12
694

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用



国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用